

長谷川宏二さんを偲ぶ

君塚正義

(1)

長谷川宏二さんが今年六月一二日肝門部腫瘍のため五一才という働きざかりで急逝された。農水省中国農試の経営研究室長という重要なポストにあり、「地域農業複合化推進のための技術開発研究」の中心的な役割を担い、かつ御自身も社会学的な手法を駆使してユニークな実践的研究をすすめていた矢先の発病そして長い闘病生活であった。

たしか発病は五六年の初秋である。同僚の橋本室長(本协会会员)が長谷川さんの眼が黄色味を帯びていることに気づき、診断の結果、東京虎ノ門病院に入院された。五三年から福山に単身赴任されたが、それが発病を早めたのではないかと今でも心残りではない。御通夜の折、近親の方々のお話によると、発病後三年近くも存命するというケースは極めてまれであり、奇跡に近いと担当医がいわれたという。恐らく頑健そのものであった故人の生命力のたくましさ、ほとんど連日のように病床を見舞っておられた奥さんの献身的な看護のお蔭であろう。

また多くの上司や同僚のはからいで筑波の農業研究センター勤務

に変わり、さらに御宅に近い都内西ヶ原の農業総合研究所併任となつた。このような多くの方々の配慮がどんなにかななくさめになつたことであろう。

そして御遺族はもちろん、友人一同一日も早い全快と再起を心から待ち望んでいた。それだけに御逝去は余りに痛ましく、まさに悔恨・無念の一語につきる。ここに更めて心から哀悼の意を捧げ、御冥福をお祈り申し上げる。

さて長谷川さんは熱心な村研会員であり、戦後農村生活研究の分野に社会的な視点や手法を積極的にとり入れた先駆者の一人である。村研大会には宮城の速刈田で開催された四〇年代初期から毎年のように参加され、数年前の柳川大会などには農技研や地域農試から多数の方が参加し、深夜まで交流したことが今でもなつかしく想起される。

また村研年報第十一集(昭五〇)の研究動向に一緒に執筆し、さらに農業経済学会創立五十年を記念してとりまとめた「農業経済学の軌跡」(農林統計協会、昭五六)でも「農村社会研究の展開と課題―農業経済学との関連において」を神谷会員と共同執筆されている。なお療養中幾度か入院をくりかえされたが、最近の「研究通信」をみると、定例研究会にはほとんど出席し、討論にも参加しておられる。恐らく何をにおいても研究会には出席したいという思いからであろう。

葬儀のあと一ヶ月ほどして西ヶ原のお宅をたづね、遺影を拝し、御遺族にもお会いしたが、伊都子夫人のおっしゃるには、退院の翌日から出勤するという几帳面さであったという。これを一徹というのだろうか、ともかく研究を何より大切にし、農業・農民を心から

心から愛する得がたい存在であった。

(2)

長谷川さんとの直接の出会い、昭和四〇年私が東北農試農家生活研究室に赴任したときに始まる。まだ結婚されて数年で、お嬢さんが赤ちゃんの頃であった。宿舎事情が悪く、長屋住いが大部分で、たしか七、八世帯つづきの狭い住宅であった。

当時岩崎場長の下に西垣氏が経営部長をされ、食糧増産にもえていた時期で、規模拡大や生産力の問題、コストダウンの研究、さらに農家生活の近代化・合理化の実証研究にうちこみ、ジープを駆つてよく農村にでかけた。また週に二、三回ゼミや研究会が開かれ、夜は場長や部長のお宅に押しかけて深夜まで議論をし、奥さん方に随分迷惑をおかけしたものである。

この自由闊達な研究環境は、宿舎が厨川という試験場内であったことにもよるが、何より錦織初代場長を始め、岩崎さん、西垣さんなど歴代の管理者のリーダーシップによるところが大きい。私共はこの先輩方から農業研究とは何か、研究管理は如何にあるべきかを学んだように思う。

長谷川さんは昭和三〇年に新潟大学農学部総合農学科を卒業、直ちに東北農試に勤務・山岸マサ室長の下で農家生活調査の方法を学んだ。山岸さんは岩手や庄内の農村を克明に調査し、「東北水田単作地帯農家の生活構造」(東北農試場報告第三号、昭三一)などを発表されている。これらの文献は農地改革後も残存した家父長的な家族関係やむら支配構造を農家の主婦や嫁の立場からするとく解明し

たもので、農村生活研究のいわば先駆的労作といつてよい。長谷川さんは山岸室長から農家生活や村落生活を構造的に把かくすることを学び、さらにそれを深め、発展させることをライフワークと考えておられた。

また彼は先輩や同僚からこよなく信頼され、旺盛な研究心の上に生来の気さくさも手伝つて、他の研究室の調査にも進んで参加し、どんな欲なまでに知識・技術の吸収につとめ、若手研究者のリーダー格であった。さらに自他共に認めるスポーツマンでもあった。新発田高校当時はラグビー選手であり、自ら「グラウンドの王者」をもつて任じていた。そして収穫祭をかねた場内スポーツ大会などではいつも経営部の名を高らしめてくれた。

また夜の懇親会ともなれば持前の美声で南部牛追いや浪曲子守唄などで一座をなごませて下さった。東北農試で同室の期間は短かったが、たのもししい若手研究者として、充実して楽しかった厨川の風物と共にさわやかな思い出となっている。

(3)

長谷川さんは昭和四一年に西ケ原の農業技術研究所経営土地利用部農村生活科に移った。当時同部は一三研究室、約五〇名の研究者を擁し、農水省研究機関の中核であった。そのうち農村生活科は四研究室で、一二、三名の研究員がいたが、抜擢されて研究室長となり、自然科学系と社会科学系の混成という複雑な科の構成で、研究の推進をめぐってトラブルが絶えず、その渦中で、実質的な研究のプロモーターとして大変な苦勞をされた。

また生活科は日本農村生活研究会（会員数約九百名）の事務局も担当し、大会運営や機関誌「農村生活研究」（当時年二回、現在三回刊行）の編集業務も行なっていたが、長く編集責任者として会の発展にも尽力された。

さらに農技研は地域農試との研究連絡業務も受けもっていたが、その面でも科長を補佐し、東北および中国農試の生活研究室との共同研究をリードして下さった。たとえば特別研究「大規模先進経営の発展方式」あるいは農水省応用研究「自立経営農家の生活構造と主婦労働に関する研究」でも主導的役割を果たした。前者については「大規模先進経営の形成と生活主体の確立過程」を執筆し、「いえ」と「むら」の変容と生活主体の成長過程のかかわりを分析している（農林水産技術会議研究成果七四号、昭四九）

また後者の研究は錦織先生（当時日大教授）を主査に、大学と試験研究機関の共同ですすめられ、生活研究の推進に大きく役立ったように思う。ここでは自立経営といっても村落社会と孤立しては存在しえず、むしろ村落の中核的存在としてさまざまな役割を担っていること、また農家婦人の生産・生活面に果している役割が明らかにされ、婦人の地位の向上が具体的に整理された。

これらの調査の過程でも長谷川さんとよく農村を歩いた。東北農試の対象地であった庄内小淀川集落の調査にも参加され、帰途新発田市郊外の豊栄町（現在は市制）の御生家に御一緒したことがある。戦前はかなりの地主だったようで、大きな家屋構えのお宅で、御母堂や跡をついでいらっしゃる弟さん御夫妻にもお会いした。

農家の長男で、農業をつぐために農学部に入ったにも拘らず、ご両親の意に反して離村してしまった。僕も同罪の身であり、時折紐

侘たる心境を語り合ったものである。しかし退職後は郷里にもどり、むら人として余生をおくりたいとも思われていた。

ここまで書いたところへ奥さんから四九日忌を無事すまされた旨の挨拶状をいただいた。そして分骨され、御郷里の墓地にも納められるという。更めて人の世のはかなさと故人への哀悼の念に胸をしめつけられる思いである。

さて長谷川さんの農技研時代で忘れてならないのは、生活科と経営各科との研究交流を活発化したことである。前にもふれたように生活科は実験系と調査系でとかく見解の相違があった。その中で彼は実質的な橋渡し役をつとめられ、その後の科の機構改革の地ならしをもされたのだと思っている。

私は昭和四九年に生活科に移り、再び長谷川さんと共に仕事ができるようになった。そして早速彼や森川会員らが中心で、農村生活研究の現状を総括しようということになり、その結果が「農村生活の現代的課題」（明文書房、昭四九）としてまとまり、新たな研究展開の契機となった。

さらに技術会議事務局に意向していた小泉さんと長谷川・田口・川島さんらの努力で、いわゆる「むら特研」（農・山村社会における生産・生活の組織化方式）がスタートし、経営研究分野でも社会的な接近方法に対する関心と期待が高まるようになった。

このように生活科の中核的存在として活躍されたが、その力量がかわれ、高橋正郎会員の後任として請われて中国農試の経営研究室長に転出されたのである。中国農試（福山）には児玉場長・木下部長の下に田口・川島・原野の各室長や橋本・工藤の両会員をはじめ、すぐれた研究者が揃い、まさに西日本における経営研究のメッ

力である。そして彼自身も西日本の実態にふれることを望んで転任を決意されたのである。それがこのようにならうとは、まさに運命とはいえ痛ましい限りである。

(4)

最後に長谷川さんの遺稿から思いつくままに業績の一端を紹介してみたい。

農村生活の研究は、いうまでもなく一つの学問ないし科学の領域の限定によって成り立つものではなく、多くの科学の進展に触発されながら、農村・農家・農業の実態に即して積み上げられてきた。

そこで彼はまず農家生活を構造的に把あくすることを旨とし、社会学における生活構造論の諸成果を援用して、「いえ」とその経済的基盤である農業経営の変容過程との関連を中心に分析枠組の構築に力を注いだ。その成果として「庄内稲作地帯農家の生活構造」(東北農試経営部資料、昭四二)をはじめ、先にふれた「大規模先進経営の形成と生活主体の確立過程」や「農家の家族形態といえ、むらの変容」(『農業経営の現代的課題』所収、明文書房、昭四九)、「農家生活構造研究の展開」(『農村生活の現代的課題』所収、明文書房、昭四九)などがある。

しかもこれらの研究を通じて、とくに生活主体に注目し、その自主的エネルギーが集落を拠点にして、生産をふくむ諸生活活動を通してどのように展開するか、そしてその展開方向や条件への解明へとすすんでいる。なおそこでは従来の「いえ・むら理論」や「共同体論」をふまえ、経営学における生産組織論とのかかわりをも重視

している。

いいかえれば農民の主体的行動として生産組織をとらえ、これを軸に農家の生活構造・村落構造および生活意識の体系的な把あくをめざしている。その点で故山本陽三氏の「農家生活構造マトリックス」などに大受啓発されておられたよりである。

しかしライフワークである農家生活構造の研究自体が未だ分析枠組の構築の段階であり、意識調査の研究も蓄積が乏しく、農家生活に関する体系的把あくにまでは至らず、今後の研究に大きな期待がよせられていたのである。

この他、農・山村の生活環境整備に関する調査にも関心を示し、山村振興調査会や農業構造改善協会の委嘱をうけ、ほとんど毎年のように出かけ、調査レポートを執筆している。しかもこれらの調査事例を整理し、「山村社会の動態分析」(農技研部資料、昭四七)として発表しておられる。

また早くから農家の世代継承の問題にも着目し、田口室長らと共に「農業における後継者育成方策上の諸問題」(農林漁業金融公庫の委託)なども発表され、この分野における貴重な成果となっている。中国農試に移ってからは、「むら特研」や「地域農業複合化の推進」に関するプロジェクト研究にとり組まれ、その成果として「地域農業組織化とむらの再編」(『農業経営の構造的再編』明文書房、昭五八)などがある。そしていわゆる「むら問題」が経営研究分野はもちろん農政からも注目され、大きな期待がよせられていたのである。

思いつくままに書きすすめたため、まだ多くの成果が落ちているように思われる。いずれにしても長谷川さんは極めて多作であり、

書き始めたら集中して一気呵成に仕上げるタイプであった。そのため共同執筆のさい、僕などはいつも迷惑のかけどおしであった。

このように有能な研究者であったから、是非再起して、現在の衰退しつつある農業・農村の再生のために「むら」をよりどころにした、まさに地域住民のための生活研究を完成していただきたい。しかし彼は忽然として逝ってしまった。こんなに悲しく無慈悲なことがあるのか。あらためて御冥福を祈るとともに、故人の遺志をつぎ、農村社会学の一層の進展と、それらの手法をとり入れ、農村生活研究を深化・発展させることがわれわれ残されたものの責務であると痛感している。

(宇都宮大学)